

薬物依存 家庭から改善

沖縄ダルク、家族向けセミナー

薬物依存症からの回復などに取り組む沖縄ダルク（森廣樹代表）は9日、依存症の子どもらがいる家族向けのセミナーを宜野湾市内で開いた。全国薬物依存症者家族連合会の林隆雄理事長と、茨城ダルクの岩井喜代仁代表が講演。親が子供のために自身を犠牲にして尻ぬぐいする「共依存」が、結果的に本人が薬を使い続ける環境をつくっている問題を指摘。親の子離れや、これまでの自身の子供への接し方などをあらためる必要性を訴えた。県内外から約40人が参加した。

全国家族連合会 林隆雄理事長

親の子離れが必要

愛知県内に住む林さんは、息子が中学時代からシンナーを始めたが、気づいたのは高校を中退して「おかしい」と感じた18歳の時だったという。買い与えた車からシンナーの袋が出てきたため問いただしたら「友達がやった」と答えた。その返事を信じていたが、交通事故を起こすトラブルもあり、息子は自宅の部屋でシンナーを吸い続けて閉じこもりになったという。

だと分かった。ダルクへの入寮で息子を「突き放す」という決心までに約10年かかった。以前は、息子本人がシンナーをやめれば済むことだと思っていなかった。しかし、ダルクの家族会で、薬物を続ける環境をつくってきた親の問題に気づいた。「薬物依存症が本人の病気なら、私たちが親は共依存症という親子関係の病気だ」。子供を何とかしたいと思っても、親は薬物依存症には何もできない。林さんは「私たちは一生懸命世話をしようという、この病を治していくことが必要だ」と強調した。

茨城ダルク 岩井喜代仁代表

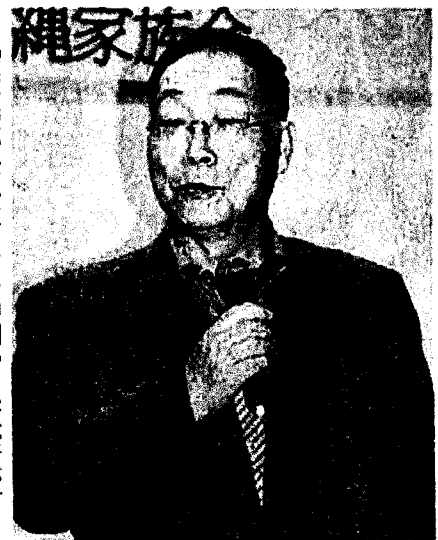
仲間の生き方学ぶ

精神科のある病院に行ったが、処方して入院させるだけでは薬物依存の根本治療に至らなかった。結果、「処方薬依存」になった。その後、別の名古屋のクリニックに3年半通っても治らず、そこには回復者やその家族がいなかった。

を家族で支えてきた。これが共依存症という病気だ」と指摘した。依存症になっっている子供は、家族がいることが当然と思っているため、「一人になったときに失ったものの大きさを感ずることができると語り、子供の自立のため、連絡が来ても「愛情を持って突き放す」ことが重要だと強調した。

岩井さんは「ダルクは薬をやめさせるところではない。薬を使わない生き方を仲間から学ぶ所だ」と参加者へ理解を促した。

また、子供を突き放す一方で、「親が回復しないと子供も回復しない」と指摘。親同士で仲間をつくり、ほかの体験者の話を聞く必要性を訴えた。自分より苦しんでいる人がいることを知ることで、「自分たちが子供に何をしてきたかを受け止め、まず自分が変わる」ことが大切だ」と語った。



「一生懸命世話をしてしまつた」という病を治すことが必要」と話す林隆雄理事長

「薬を使わない生き方を仲間から学ぶ所がダルクだ」と述べる岩井喜代仁代表